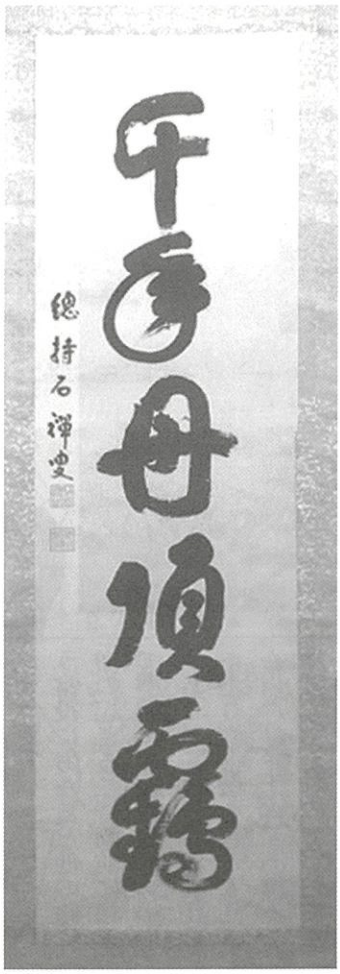
蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘
〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番地10
TEL.(0258) 32-2811
◆スタッフ◆
小林国二 小林善秋 高橋潔 加瀬由紀子
室賀清輝 近藤マリ子 近藤善信
後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社



お芽出たい言葉が書かれた掛け軸

迎春

今年も宜しくお願い申し上げます

平成十六年

翠巌 龍弘

鶴は千年亀は万年といわれておりますが、安善寺では正月には、三輪超世画伯の「富士山」・新井石禅禅師の「千年丹頂鶴」の掛け軸を掛ける習慣になっております。日本の各家におかれましても、ご来光や松竹梅・鶴や亀・七福神等の掛け軸や何かお目出たい言葉の意味する掛け軸を掛けられるお宅も多いようです。

お正月を芽出たく迎えると共に、来るべき新年が良い年であるようにとの願いが込められての事ではないでしょうか。しかし昨今の世の中をみますと、国内に於いては悲惨な事件が続発し、一番の安住であるべき家庭に於いても目を覆いたくなるような凄まじい事件が起こっております。

世界に目を向けるとイラク戦争・その後のテロやゲリラ、毎日多くの人命が失われております。日本も自衛隊のイラク派遣で、憲法問題も含んで世論が割れ、日本国内に於いてもテロの心配をしなければならなくなり、平和で穏やかな社会には程遠い一年になりそうです。

しかし、そうならない為にも私共一人ひとりが思惟し、周りにながされないようにしなくてはなりません。

昨年は「何でだろう?」と言う言葉が流行しましたが、廿一世紀、過去の歴史も学習し、世界の情報が瞬時に知る事が出来る今日、世界中の人々が平和を願い、命の尊さを主張しているのにも拘わらず、文化・民族・宗教の違いからくる紛争等が起きるのは「なんでだろう?」自分の命を犠牲にしてまでのテロが行われるのは「なんでだろう?」。聖徳太子の十七条の憲法の第一条に「和を以って貴しとなし…」とあり又、十条には「彼の是すなわち我の非にして、我の是すなわち彼の非なり。我必ずしも聖に非ず。彼必ずしも愚に非ず。ともにこれ凡夫(ぼんぷ)のみ」とあります。

「和」を英語に訳すと「ハーモニー」です。武力だけでの解決では怨念を残すだけです。

オーケストラでは、色々な楽器で演奏され、素晴らしい音楽が奏でられまさに「ハーモニー」が存在する様に、人間社会も、年齢・性・職業・人種・宗教・文化等さまざまですが、人それぞれが自分に与えられた役割を自信を持ってやり、同時に相手の立場と身になって、思う事が出来るならば、傲慢さがなくなり、自然に和の精神がかもし出され、争いの無い、素晴らしいハーモニーの世界が生まれるのではないでしょうか。

ご家族の皆さまでご覧ください

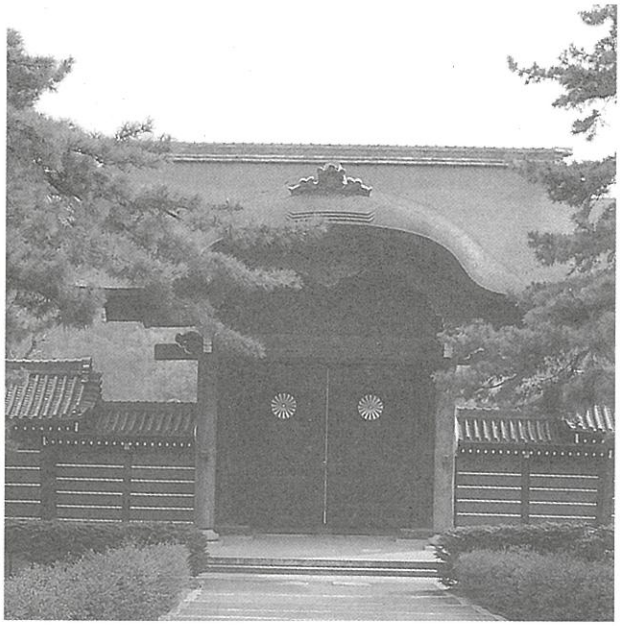
【大本山總持寺　雲水日記】
いろいろな気遣いが必要です

近藤　真弘

總持寺というのは修行道場であると同時に、曹洞宗で一番多くの檀信徒を持つお寺です。

そのため、一般的に皆さんが想像している修行、例えば坐禅や掃除などのほかに、毎日多くの法要もこなさなくてはなりません。

僕が始めに入った看読寮という所は法要を行う際の鳴らしもの（鐘や太鼓）を専門に鳴らすところです。すべての鳴らしものは回数、タイミング、音の大きさなど細かく決まっています。最初のうちは何もわからず、よく間違えて怒られたので必死に覚えました。その他、看読寮では法要の意味や法要差定という、いわゆる法要の流れを完璧に覚えさせられます。



普段の生活は、三十畳ほどの部屋に五十人ほどの生活用具を置き、着替えや勉強などはその部屋ですべて行わなければなりませんでした。

以前説明したとおり看読寮には様々な「當役」という形で自分たちのやることが振り分けられます。當役によって起きる時間も違い、例えば直堂（じきどう）という當役にあたると他の修行僧の起きる二時間前に起きて準備をし、「振鈴」といって大きな鈴を振りながら山内を走り修行僧を起こす仕事も当たります。ほかの様々な當役も覚えることがたくさんあり、九時開枕（就寝時間）でしたがいつも十二時近くまで勉強していました。

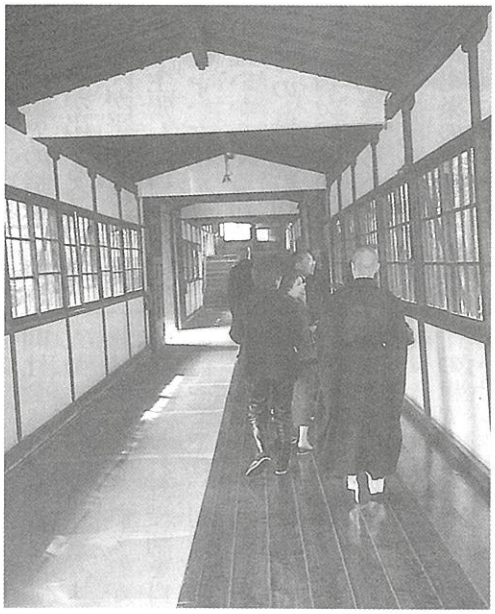
僕が本山に上山したのは三月で、とても寒い時期でしたが、すべての部屋にストーブがあるわけでもなく、冷たい木の床を裸足で歩き、冷たい水で毎日雑巾がけをするのはとても辛かったです。私たち修行僧は四と九のつく日に「浄髪」といって頭を剃るのですが、最初のうちは寝るときに頭が寒くてもう大変！

上山して三ヶ月間は禁足期間といい、外部との接触を完全に断たなければいけませんでした。面会はもちろん、電話や手紙でも外部と連絡をとることはできません。しかし、上山して二ヶ月ちょっと経った時、僕らは皆一人一枚のハガキをもらい、親に出してもいいといわれました。今では何を書いたが覚えていませんが、なるべくたくさんのことが書けるようにかなり小さな字でハガキいっぱい書いたのを覚えています。

他にも總持寺には「看読寮」以外にもいろいろな寮舎があります。受付を担当する「知客寮（しかりょう）」・修理や警備などを担当する「直歳寮（しっすいりょう）」・料理を担当する「典座寮（てんぞりょう）」・拝観坐禅担当の「布教参禅寮（ふきょうさんぜんりょう）」など、数多くの寮舎があります。

これらの寮舎を僕ら修行僧は三ヶ月ごとに転役という形で移り、いろいろな寮舎のことを学び、そこで与えられた當役をまっとうします。

三ヶ月の禁足期間を終えて僕が最初に転役した寮舎は「侍局（じきょく）」というところです。ここは總持寺の住縮である禅師様がお住まいになっているところで、僕はそこで「方行（ほうあん）」といって、禅師様の身の周りのお世話をさせて頂く役になりました。侍局という所は来客が多いために、總持寺の中でもひときわ奇麗で立派な建物の一つです。



身の周りのお世話といっても、僕が行者をしていた板橋禅師は常にご自分でよく動かれる方でしたので、我々方行は来客の際のお茶出しや侍局の掃除が主な仕事でした。

それまではお茶を出すことくらい造作もないことだと思っていたのですが、お茶の淹れ方から出し方、更には座布団の向きまで、いろいろな気遣いが必要であることがわかりました。

「患者サマ」と呼ばれることへの疑問

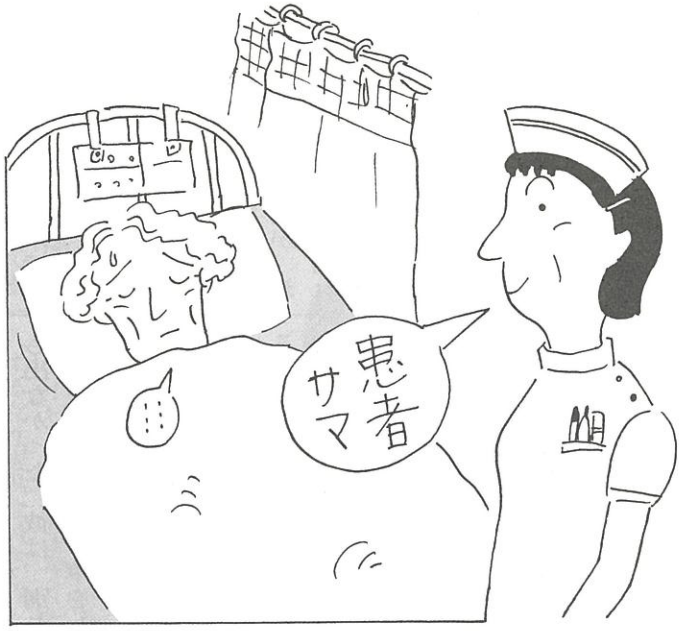
ビハーラの会　田宮　仁

本誌『蔵王山安善寺』の読者の方の中にも、病院で「患者サマ」という表現を聞かれた人がおられると思います。ここ十年くらいの間で、相当数の病院でこの「患者サマ」が使われるようになってきました。近年では、看護系の論文にも堂々と「患者様の○○について」というようなタイトルが登場したりしています。

私はひねくれているのか、この「患者サマ」が耳障りでなりません。「患者さま」と「様」付けで呼ばれたくて病気になった人はいないと思いますが如何でしょうか。慇懃無礼という言葉がありますが、この「患者サマ」などは、その最たるものの一つと考えます。

医療の世界では、医療の在るべき姿として「患者中心」とか「患者本位」の医療であることということがいわれて久しいのですが、そのようなことが声高にいわれること自体に、医師中心、医療本位の実際があるからこそのことと思われます。

真に「患者中心」に展開して欲しいのは、医療の中身のはずです。言葉だけ丁寧な表現に変えたからといって、その実質も変化したかというと、決してそうではないと思われます。



医療者がいう「患者中心」という場合は、医療側の論理が前提として存在したところでの医療者側から見た「患者中心」であり「患者本位」であり、表現としての「患者サマ」でしかないと感じています。皮肉に言い換えますと、「患者サマ」すなわち「お客様」すなわち「お金を払ってくれる人」、だから「様」を付けて呼ぶのです、とさえ聞こえることがあります。言葉と実際の医療サービスや医療者の態度に齟齬がある場合のことですが。

勿論、医師として看護師として、その専門家としての実績やお人柄に敬服する方で、「患者様」という表現をお使いになっている人も何人か実際に知っています。そのような医師や看護師の言動には、病める人への滲み出るような「いたわり」があります。しかし、その病院全体として「患者サマ」と呼ぶことにしました、というようなマニュアル化された場合が問題と考えています。

「患者サマ」と「様」付けで呼ぶくらいなら「ナンデダロー」、と思うことが実際の医療の場ではよくあります。たとえば、病院で各種検査を受けることがありますが私は「病院オリエンテーリング」と呼んでいます。

ナンデ具合の悪い人間の方が、床に張られた色別のテープに沿ってグルグルと病院内を移動していかなければならないのか。検査を受ける人（患者）中心に考えたら、多少の建築上の無理をしても、その人を中心に各検査部門を配置すればいいはずです。

これは一例ですが、医療者にしてみたらあまりにも当たり前で念頭にもあがらないことでも、患者側、利用する側からすれば我慢・辛抱していることが数多くあります。しかし、自分自身や家族の身体が「人質」に捕られているようなものですから、我慢しているというのが実際ではないでしょうか。

インフォームド・コンセント（医療者からの十分な説明と、それに基づく同意）にしても、日本の医療の現段階では、患者やその家族の側が十分に説明できる状況作りと、その説明や希望に合意していく医療が必要と考えています。

今、日本の医療はそのシステムも含めて大きく変わろうとしています。そこには真の「患者中心」主義が生き残るものと思います。従来通りの医療の論理や権益が優先したところでの、「患者サマ」と言い換えるだけで、実質が伴わない小手先の対応では淘汰されるはずです。

「先生サマ」「看護婦（師）サマ」と呼ばれたらどんな気持ちでしょうか。

合掌

読者からの便り

我が家の記念日

杉並区●本間ミツエ

四十数年前の二月二十六日は、今でも昨日のように思い出される。

上野駅から夜行列車に乗って、まもなく隣の席に若い男性が座った。私は本を読み始め、「高崎です」と駅員の案内と共に外を眺めた。その時、隣の男性から「どちらまで」と尋ねられ、「長岡です」と答えると、「自分は山形で、大学の春休みで帰省です」と話した。

列車が長岡に近づき、下車する支度をすると、デッキまで送ってくれて「ああ雪だね、気をつけて」と親切に気づかってくれたが、お互いに名前も告げずに別れた。早朝の駅のホームは白く小雪が舞っていた。

卒業し、長岡の病院に勤務をしていたある年の十二月、雪の降る日だった。帰宅しょうとバス停で待っていると、見覚えのある彼がこちらに歩いてきた。あまりに唐突な偶然の再会に声も出なかった。彼は、別れた時を思い出して下車をしたと説明した。

やがて文通が始まり、そして婚約し、風花の舞う十二月に長岡で結婚式をすることに…。

出会いの二月二十六日は、我が家の記念日となり、四十二年間人生を共にしたのだが、二年前の朝、元気に出かけた夫は、仕事で裁判の証人審問中に気分が悪くなり、突然人生を閉じ、一人彼岸に旅立った。

思い出の多い縁をと、安善寺様にお願い申し上げ、月参りをさせていただいている。

末筆ながら、縁とは不思議なこと、御内室様と私、娘共々同窓生です。雪の散らつく季節になると、なつかしく思い出します。

長岡空襲の思い出

長岡市●小林タケ子

毎日戦争の文字のない日はない。遠い国のことと思わず、六十年前のこの地に事実としてあった戦場の中を生きた私の体験談です。

（日記より）

昭和二十年八月一日（水）

いつものように朝出勤。七月分請求書眼科を書き終え六時帰宅。ラジオの電波おかしい。九時軍情報入る。本土敵機B29侵入。空襲の支度す。サイレンなしに低い爆音、投下音。電気消え、一瞬外が明るく父が「逃げよう」と、母と三人外へ。

川崎の土手へ。外はもう大勢の人の波。次々と子供の泣き声、呼び声。「ガラ～」「ドーン」。形容分からず、無我夢中で走る。空は昼の如く明るく、町の方は火の海…。どの位か分からぬ中に、東の空朝の光。不気味な光り。この世とは思えぬ。父母は幸い焼け残った我が家へ。私は急ぎ病院の勤め先へ。

「あっ!!」、そこには跡形もない焼け跡。しかし、近くの残った水利組合が臨時救護所に。朝食もとらず、一睡もせず、すぐに活動が始まる。

八月二日（木）

次々に怪我人が…。火傷の子供、出血多き人。手術の道具も揃ってないまま院長一人のガス壊疽の片足切断。薬もない。毎日我を忘れて先生方の手助け。その間に警報のサイレン。息を引き取る人。食糧もないまさに野戦病院…。夜はねられぬ。日記中断…。

情け無い。疲れて嘔気と、だるく、倒れてしまった。

現在は、スーパーには夢のような品物、食物は山積。あれは夢だったのかと…。

俳句の会一年生

上越市●仲野　ふみ

田の畦の土筆を摘んで
小皿盛り

ネクタイが春を呼ぶ
孫の晴れ姿

一杯の朝のみそ汁
茗荷の香り

佐渡はるか見える
浜辺の白日傘

ちらちらと雪見障子の
一間かな

新幹線駅に出迎え
娘の笑顔

夫の忌に熱燗一口
小正月

年明けて花束届く
誕生日

八十路の坂を越いし今
幸せ感じて生きる喜び

月日の経つのは早いもので、長岡から上越に引っ越してから丸六年の月日が経ちました。安善寺様にはいつも大変お世話様になっております。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

今は、俳句の会に一年生として入り、皆さんとご一緒に、楽しく自分の選んだ人生を大事に、一歩一歩前進するのみです。皆さまのご健康をお祈り申し上げます。

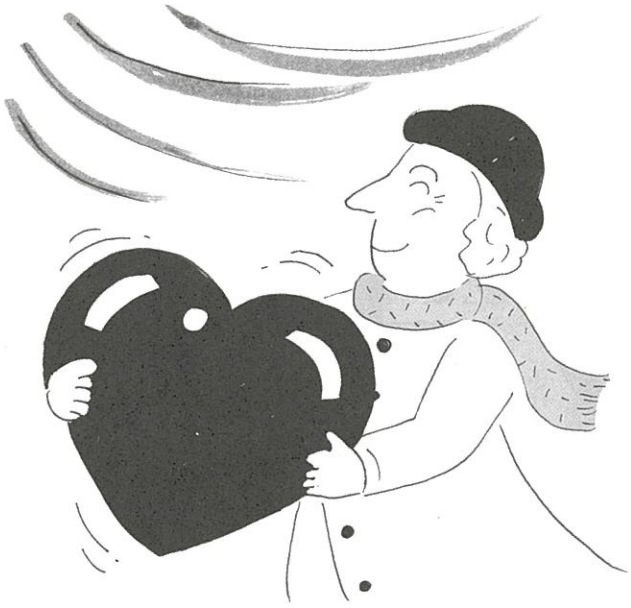
まごころをおとどけする配膳サービス

新潟市●高橋　利雄

「じゃ、行きましょっ」。短く、鋭く、配食サービスの提供ボランティアさんの声が飛ぶ。冷風雨の中、躊躇するまもなく、暖かい夕膳を抱え車から飛び出し、足早に利用会員さんの待つ玄関先へと向かう女性提供会員さんの後ろ姿を慌てて追う。

早い早い、配食提供会員さんの気持ちが痛いほど、冷たい風と一緒に私の胸にも伝わる。

無言の声が聞こえてくる。「さー、冷めないうちに、暖かいうちに召し上がれ」。私の足が追いつかないもどかしさ。一歩だけ踏みとどまって私を待つ配食サービス提供会員さんの思いやり。チャイムを押し、到着をお知らせする配食サービス提供会員さん。



玄関に最も近い部屋の、更にまた敷居に近づけて敷かれた寝床から手を伸ばし、横になったまま配膳を引き寄せる女性利用会員さん。モッソリと不自由な身体を引きずって姿を現した男性利用会員さん。キチンと正座をし、配食サービス提供会員さんが配膳を整えて差し出すまで、笑顔を絶やさずお待ちになる女性利用会員さん。そして、時節の花を活け、小粋に玄関先を演出される殆どの利用会員さんに、一心にわき目もふらず配食サービス記録を手早く記入する女性提供会員さん。

不思議なことに、狭く、小寒い玄関先なのに、そこには暖かく滞りない穏やかな流れがある。まるで、美空ひばりの歌う「川の流れ」のように…。

配膳をお待ちになる方も、お配りする方も皆さん私より先輩だ。年齢からいって、誰しもが、ある人は会社のため、ある人は妻子のため、ある人は夫や子のために、身を粉にして働き、長い道をわき目もふらずに歩いて来られたはずだ。

現在を人生の終着駅と捉え、くたびれ果てた我が身を横たえ、慰め、たんたんと過ごされておられるのかなと思うと、この「配食サービス」を通した「支え合い」や「安否確認」の意味の重要性も、価値もそこにあるのではないかと思われる。

古く狭い住宅地に漂うすえた匂いと、ボランティアさんの「一隅を照らす」ご活躍に、一抹の感動を覚えた実習日の一日でした。

尚、今回の配食予定は十四軒でしたが、四軒がお留守のお知らせで、配食は十軒でした。所要時間は夕方三時から四時までの一時間。

「縁の下の力持ち」の男性提供会員さんの提供される絶妙な配食コースと、卓越した運転技術にはほとほと感服。しかし、冬場の苦労話の種は尽きないご様子でした。私の小さな感動…。

あゝ人生八十路

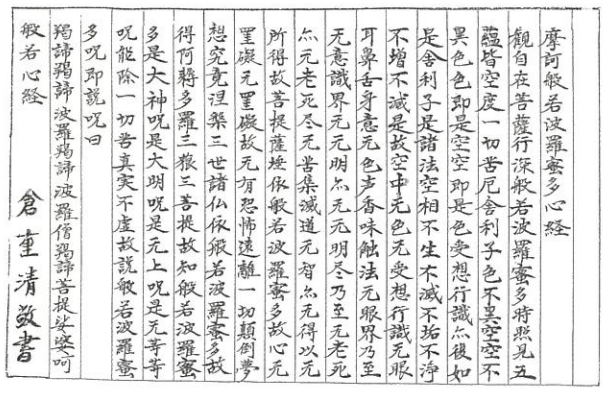
長岡市●倉重　清

光陰矢の如し。ふるさと見附を離れて六十有余年。他家奉公～軍隊～戦争又戦争～傷痍軍人となり、療養生活五年の昭和十九年全快～公務員就職。

激動昭和～苦難の人生流す涙幾度か。不思議に生きた八十六。これ佛へに神仏祖先の加護と平素信仰の般若心経、功徳のお陰と信じたゞ有難く思う。

ふるさとは　恋しかりけり
守門の山　刈谷田の川
尋ねんとする友　皆亡く
たゞさびしく蝉の声
人生のけわしき山坂
無事越えて
笑顔で帰りたい
心のふるさと

倉重さんによる写経



摩訶般若波羅蜜多心経
観自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舎利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舎利子是諸法空相不生不滅不垢不浄
不増不減是故空中无色无受想行識无眼
耳鼻舌身意无色声香味触法无眼界乃至
无意識界无无明亦无无明尽乃至无老死
亦无老死尽无苦集滅道无智亦无得以无
所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心无
罣礙无罣礙故无有恐怖遠離一切顛倒夢
想究竟涅槃三世諸仏依般若波羅蜜多故
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
多是大神呪是大明呪是无上呪是无等等
呪能除一切苦真実不虚故説般若波羅蜜
多呪即説呪曰
羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩婆訶
般若心経　倉重清敬書

他の過失は見易(みやす)けれど自らのは見難(みがた)し

第二回『ＫＡＫＡ笑の会』終了

良い姿勢・良い笑顔が一番

長岡市 品田　勇

鏑木先生をお迎えしてのＫＡＫＡ笑の会に好奇心を感じながら、会場の安善寺様の本堂に伺った。大勢の皆さんがお集まりになっていた。

本堂内は座布団が敷き詰められ、真ん中から前の席は誰もいない空席。何となく遠慮気味なのだろう。

いよいよ開会の時刻になった。方丈様のご挨拶があり、続いて代表の加瀬由紀子さんから鏑木先生のご紹介があり、皆さんは行儀よく正座されていたが、先生がお席につかれるや突然、「皆さん、前の席が空いています。席を空けずに詰めてください。座る方がなければ、この座布団は片付けます。どうしますか？」と重ねて申されました。

皆さんもじもじされているばかりなので、二～三の方が前の席へ移動されはじめました。「早くやりましょう」と、てきぱきと指示されたので、ようやく空席をなくすことが出来ました。

先生は、白のカッターシャツに赤いベストの軽快な服装で、気楽なムードで接してくださいました。

奏者の山田淳子さんを紹介され開演に。「皆さんの前に掛けてある歌詞のうち、何から始めますかね。みんなお分かりの歌詞と思いますが、まず元気のよい歌から始めますかね。狸囃子のショウショウ寺はいかがですか。方丈様、お寺さんに関わる歌詞ですが、宜しいでしょうか」と言われ、方丈様の了解で決定し、先生は狸のいでたちよろしく、ポンポコポンのポンと始まりました。

会場は楽しいムードでいっぱいになり、皆さん童心にかえって大変よいムードとなりました。

先生はイスの上に立ち上がり、後ろの皆さんの様子を見ながら、そして、道化ながらの説明は全員の心の和を歌や音楽に溶け合わせて、一同大喜びでした。

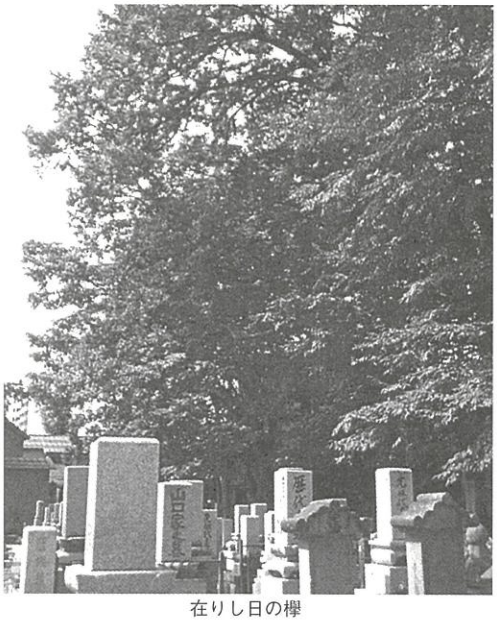
声高らかに、時には音程の変化を極端につけながらの先生の独唱は、皆さんに感動を与えていました。

さらに先生は、皆さんは人に接する時、どんな態度で接しますか？　それについて一言申し上げます、と言われ、首筋を伸ばし、笑顔が良いですね。怒り顔はだめですね。人は後頭部でものを考えるのと、前頭部で考えるのと、どちらが良いと思いますか。後頭部の場合は晴々とした顔になり、前頭部の場合は眉毛の間にシワが出来ますね。出来るなら良い顔でありたいですね。良い顔の場合は良い考えが出ます、というお話をされました。

そして、皆さん自分の手で後頭部を押さえてください。姿勢が良くなり、歌う場合も晴々とした声が出ます。日常も出来るなら良い姿勢で、良い笑顔でいたいものですね、と結ばれました。

盛会のうちに先生と奏者の山田さんへの花束贈呈があり、賑やかに終了いたしました。今後も会を重ね、日常の生活にうるおいを持ちたいと思います。

大欅の後には小さなお地蔵様が安置されます



在りし日の欅

安善寺のシンボルでもありまた、強風が吹く度に不安材料の一つでもありました墓地奥の大欅を昨年九月に急に隣接の家が引っ越され更地になるという事で、その地をお借りして大型クレーンが入り、合計十四本を伐採する事が出来ました。

安善寺の本堂並びに稲荷堂を長岡空襲の戦火から守ってくれた欅でしたが年月を重ねる内には焼けた処から腐り始め、空洞の大木に皮が被さっているだけでした。

その折には壇信徒の皆様に経費等の負担をお願い致しました処、早速多くの方々から浄財をお送り頂きました事、紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

切り口が生々しく残っておりますが、雪解けには十八体の小さなお地蔵様を安置する事になりました。

旬歌 愁灯

[その三] 南部牛追い歌

加瀬由紀子

林立する中心街のビル群を外れ、郊外に伸びる私鉄沿線の町々は、東京の下町の雰囲気を残し、親しみやすい顔を見せる。

編集記者としての数年間を暮らした下板橋の駅は、サンダル履きの買い物帰りの女性や定期券をぶら下げた小学生が降りた後は、閑散としている。朝晩のラッシュ時間帯を外せば実にのどかな駅がいくつか続く。

東部練馬には、仕事を頼むカメラマンがいて、よく通ったものだった。彼に頼むと、なぜかマイナーな写真も手に入った。「刺繍をするドイツのおばあさん」といった具合に。

ある冬の夜、立ち寄った帰り道のことだった。踏み切りを渡ると、裸電球の揺れるおでんやの屋台が出ていた。香ばしいだしの匂いに誘われ、丸イスについ腰を降ろした。「男山ですか。秋田の酒ですね！」一升瓶の奥で主人のうなずく声。

ふと見ると隣に小柄な老人がいてこちらを振り返った。「おめ、あぎたか」。東北訛りのその目は既に酔いが回っていた。「残念ながら新潟ですが」。酔客の隣に座ったことを後悔しながら、適当に、とおでんを頼む。「そうだべ、おけさ、だ。新潟はな」。どうやら彼は民謡に関心があるらしい。

「そちらさんは秋田のご出身で、民謡がお好きなんですね？」と尋ねると彼は「秋田でなく、青森だ」。といやいや返事をする。「青森はどちらで？」「五所川原だ、それが何だ」。「いや、私も五所川原には大学時代に行きました。太宰治の斜陽館、まだありますかねえ」。気まずい沈黙の後、男は猜疑心に満ちた目で私をにらんだ。「おめはデカか！」新参者を警戒していることは明白だ。「こんないい女はデカにはいませんよ」もとより冗談の通じる相手ではなくブンと一蹴される。「ま、お近づきに」と男山を彼のコップに注ごうとすると。「なんだと、おらは焼酎だ」。険悪な雰囲気になる寸前、主人が助け舟を出してくれた。

とっつき悪いが、ヤスさんはそこの地下鉄の工事現場で真面目に働いている。東北からの出稼ぎで民謡が得意、と。「生意気そげな女に余計なこというでねえだ！」吐き捨てるように言うと老人は顔を背けてしまった。

こんな時は早く切り上げるのが賢い。必死でほお張るおでんの熱さったらない。そのうちにすーすーと寝息が聞こえてくる。ヤスさん、風邪ひくヨ！　と主人が声をかける。彼の脇のコートをかけるようにと私にあごでサインをする。仕方なく手にしたよれよれのコートは、その持ち主の人生を私に連想させて余りあった。

東北のどこかの町で指折り数えて待ちわびる家族たち。農閑期の数ヶ月を都会の片隅で黙々と働き、こんにちの日本の繁栄を支えて来たのは、まさに彼らだ。

顔を少し起こすとうめくような声で、「田舎なれども…南部の国は…」老人は歌い始めた。「西も東も…金の山…コラサンサエー」何と悲しい歌なのだろう、金の山、それは彼の望郷の想いか、むごい皮肉なのか…否、彼の脳裏にはふるさとのなつかしい山々が、光り輝いて見えているに違いない。

私は勘定を払いながら「ヤスさん、歌、ありがとう」。とお礼を言った。「南部牛追い歌だ。これくらい覚えておけ」。老人はうつぶしたままだった。

私は無愛想な老人の、決して上手とは言えないが、心を揺さぶる民謡との出会いに感謝した。寒い冬の夜、荒れ狂う吹雪の音に南部牛追い歌が重なる。木枯らしの東部練馬のヤスさんと共に。

お別れ

（平成十五年九月～十二月月末）

大塚昭一様　九月五日寂
長岡市袋町

●

矢澤昭吉様　九月九日寂
新潟市小湊町

●

河野シゲ子様　九月十七日寂
長岡市中島

●

青柳ノブ様　九月十八日寂
長岡市今朝白

●

内山マツエ様　十一月十二日寂
長岡市日赤町

●

菅原祐子様　十一月廿六日寂
長岡市下柳

●

土田五子様　十二月六日寂
長岡市中沢

ご冥福をお祈り申し上げます。

ペコ大蔵日記
パートⅡ

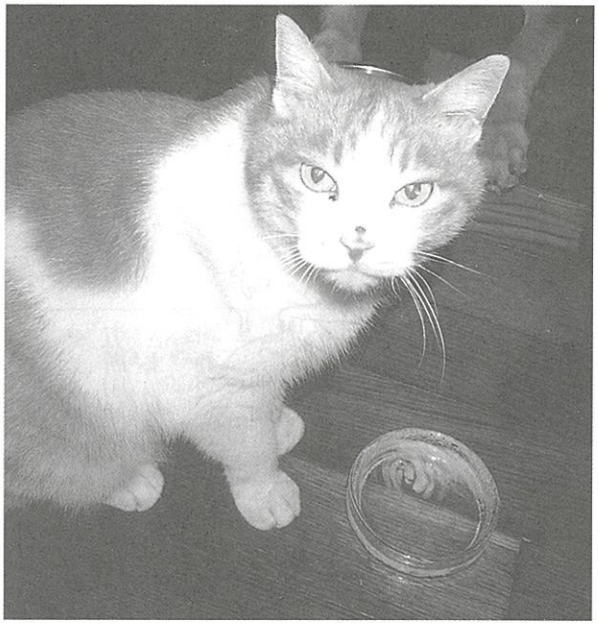
取り越し苦労でした

ペコのひとりごと

私の独り言を皆様に聞いて頂き始めてから早いものでもう十八回めになりました。私の目から見たお寺の様子や出来事をお伝えしてきたのですが、最近の私はあんまり動きまわらなくなりました。

でもこの秋は比較的暖かい日も多くあったので、ベランダの筵の上で横になるとお母さんが洗濯物を干しに来たのもしらないでぐっすり・・・何時だったか「ペこ！大丈夫」っていって私の鼻のあたりで手を左右に振ったりしていました。年だから心配なのでしょうか？　でもまだまだ何処も悪いところはないので大丈夫です。

そうそうこの前二階で一番下のお兄ちゃんが友達と一緒に大きな板を買ってきて、それをのこぎりで切ったり、金槌で釘をうったりしているのです。何をしているのかと思ったら部屋の入り口のドアを直しているではありませんか・・今までは、四人も兄弟がいたので部屋の境はアコーデオンカーテンで仕切られていましたが今は一人しかいないので、寒さに向って隙間風が入ってくるのを防ごうというのです。が、ちょっと心配になってきました、と言うのも今までの入り口なら横から簡単に入れたのですが、今度木のドアがつくと私では開けられません。これから寒くなるのに、お兄ちゃんの部屋に入れなくなったら一大事です。でも、私のそんな心配は取り越し苦労でしかなかった事がすぐに解かりました。出来上がったドアを見て私は言葉が話せたならきっと「お兄ちゃんありがとう！」と言ってお兄ちゃんに抱きついたかもしれません。



木のドアの下の方に丁度私が通れるくらいの小さなドアがついているではありませんか・・・感激でした。多分、出てしまった他の兄弟達もこのドアを見て、「あいつは本当にいい奴だよな！」なんて声が聞こえてきそうです。

今年のお正月は何人帰って来れるのかな？　大勢で賑やかがいいな！

編集雑感

明けましておめでとうございます。本年も皆様の投稿宜しくお願い申し上げます。皆様あっての広報ですのでご意見・体験・感じること何でも結構です。どうぞ原稿をお寄せ下さい。

平成十六年の干支は申、六十干支では二十一番にあたる「甲申」（きのえさる）です。申年の方は機敏にして進取の気性に富み若くして異色の出世をする人がいる。研究意欲が旺盛で、世話好き。味方もあるが、口が禍して敵をつくることも。軽率に人を信用して失敗したりもするが、生来が怜悧な素質を持っているので晩年安泰とのこと。どうですか、申年の方々は。

今年も激動の年になりそうです。世の中は問題山積で政治・経済・教育・環境等々どれをとっても溜息がでそうです。

まずは己の道を確立。一人ひとりが自分を確立すれば問題ないのですが…。そこが問題です。常識が常識でなくなり、情報に左右され、判断基準があやふやな現代を「不言・不視・不聴」の三猿と決め込む訳にもいかない。何はともあれ先輩方々の道徳感を若輩者に伝授戴かないと日本は駄目になります。

本年の「勅題は幸」です。自分だけが良ければ・人のことはほっておけ精神は終わりにして、皆様と供に幸せな世界を築く努力と行動をしませんか。その第一歩はささやかではありますが、この広報の投稿からだと思います。ちなみに、次号のテーマは「春」です。春にまつわる思い出などをお待ちしております。

うす壁にづんづと寒が入りにけり（一茶）

皆様お体ご自愛下さい。

小林国二　拝

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。
ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例
- ●思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- ●私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- ●教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。
- ●嬉しい・楽しい／嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

第二十五号、新年は平成十六年三月十日（水）発刊予定です。

欄外のひとことは、「仏教伝道協会発行・東西のこころ」より